

研究報告

看護大学生のボランティア活動の実態とボランティア活動継続の要因

道 廣 睦 子, 小 林 廣 美, 若 井 和 子, 佐 藤 静 代
齋 藤 智 江, 竹 内 美 樹, 森 崎 由 佳

兵庫大学健康科学部看護学科

要 旨 本研究は看護大学生のボランティア活動の実態を把握し、ボランティア活動の継続意志と、ボランティア活動成果・継続動機との関連を明らかにすることを目的とした。調査対象者はA県B大学看護学科学学生1・2・3年生の230名で質問紙調査を実施した。有効回答は162名であった。看護大学生の約8割が大学入学前にボランティア活動の経験があり、大学入学後ボランティア活動をしていない学生は全体の8割で、理由として機会がない、忙しくて時間がない、アルバイトしている等があげられた。ボランティア活動を継続したい学生ほど、人生が明るく喜びが広がるなどの意欲向上や人間関係の広がりがあるなどの成果を認識しており、ボランティアの継続動機につながっていた。しかし、多くの学生に継続意志があるにも関わらず、大学入学後にボランティア活動をしている学生は約2割であった。「機会がない」を理由にしている場合は機会があれば積極的に活動することにつながる事が考えられる。ボランティアの情報提供を行い、ボランティアの活動成果が実感できるような働きかけが必要であることが示唆された。

キーワード：看護大学生、ボランティア活動、ボランティア活動成果、ボランティア継続動機

緒 言

共生という現代社会の目指す方向に合致するボランティア活動は、大学が目指す地域貢献と教育的意義に合致するものである。中教審は共に生きる力を構築するものとしてボランティア精神をあげている¹⁾が、ボランティア活動は、学習方法・内容としても自己教育力、クリティカルシンキング、ソーシャルスキル等、生きる力、共に生きる力を育成するものとして位置づけることができる。また、ボランティア活動は他者のためといった目的のみならず、援助者自身の自己啓発や自己実現のためとして認識されつつあるとした研究²⁻⁵⁾がある。ボランティアの援助成果については、高木²⁾は援助行動の効果

を援助の被援助者に与える「援助効果」と援助の援助者自身に与える「援助成果」に区別しており、ボランティアをする人自身がボランティア活動の経験を通して何らかのポジティブな成果を得ていることを立証している。妹尾ら³⁾は中高年者においても若年者と同様に援助成果が大きいほど、その援助成果をもたらし続けたボランティア活動をその後も継続しようと強く動機づけられることを明らかにしている。

学生は、ボランティア活動をどのように考え参加してきたのか、ボランティア活動によって何が得られると考えているのか等学生のボランティア活動に対する意識を知ることにより、今後地域貢献へ向けての足がかりを得たいと考えた。

本研究は看護大学生を対象にボランティア活動の実態を把握し、学生のボランティア活動の継続意志とボランティア活動成果・継続動機との関連を明らかにすることを目的とした。

2011年9月27日受付

2012年1月20日受理

別刷請求先：道廣睦子，〒675-0195 加古川市平岡町新在家
2301 兵庫大学健康科学部看護学科

研究方法

1. 調査対象者：

A 県 B 大学看護学科学生 1・2・3 年生の 230 名である。

2. 調査内容：

大学入学前のボランティア経験の有無，ボランティア活動の内容，ボランティア活動日数，ボランティアを続けたい理由，大学入学後のボランティア活動の有無，ボランティア活動の継続意志，ボランティア活動成果および継続動機とした。ボランティア活動成果と継続動機の質問項目は妹尾ら³⁾が作成したものを許可を得て使用した。ボランティア活動成果に関する質問は、「他者を思いやるという意識が根づいた」「人への対応が好ましい方向に変わった」など 17 項目よりなり，自己のボランティア活動からそれらの成果がどの程度得られたと思うかを「思う：4 点」「少し思う：3 点」「あまり思わない：2 点」「思わない：1 点」までの 4 段階で評定する。得点が高いほど，活動成果が得られているよう配点されている。

妹尾ら³⁾が作成したボランティア継続動機に関する質問は「自分の持っている知識，技術を使う練習になる」「対象者の苦しみが和らぐ」など 18 項目よりなり，「あてはまる：4 点」「少しあてはまる：3 点」「あまりあてはまらない：2 点」「あてはまらない：1 点」までの 4 段階で評定する。得点が高いほど強く活動の継続が動機づけられているように配点されている。なお，本質問項目は，妹尾ら³⁾が山口ら⁶⁾のボランティア活動動機測定尺度をもとに作成したものである。

3. 調査期間および調査方法：

平成 23 年 4 月に自記式調査を実施した。

4. 分析方法：

分析は探索的因子分析，信頼性分析，一元配置分散分析を行った。以上の統計解析には，統計ソフト SPSS Version 18.0J for Windows 使用した。

5. 倫理的配慮：

学生には研究の主旨を話し，協力しない場合での不利益が生じないこと，調査は無記名で，回答内容で個人が特定できないことを話し了解をもらった。また，研究目

的以外には使用しないこと，研究終了後はシュレッターで廃棄することを説明した。兵庫大学倫理委員会の承認を得た。

結 果

1. 対象者の属性

学生 230 名に調査用紙を配布し回収数は 211 名（回収率 91.7%）であった。そのうち，統計解析にはいずれの調査項目にも欠損値のない 162 名のデータを使用した（有効回答率 76.8%）。1 年生 55 名（34.0%），2 年生 54 名（33.3%），3 年生 53 名（32.7%）であった。大学入学前のボランティア経験の有無は，有りが⁵⁾129 名（79.6%），無しが 33 名（20.4%）であった。

2. ボランティア活動の実態

ボランティア経験有りとして回答した 129 名の大学入学前の活動内容（複数回答）は，障害者を対象とした活動 31 名（24.0%），児童を対象にした活動 43 名（33.3%），高齢者を対象にした活動 63 名（48.8%），イベントに関係した活動 53 名（41.1%）であった（表 1）。

活動日数は 1 年間に 1～10 日が 98 名（76.0%），11～20 日が 10 名（7.8%），21～30 日が 6 名（4.6%），31 日以上が 15 名（11.6%）であった（表 2）。

過去のボランティア活動の結果，ボランティアを続けたい理由は，「人の役に立てた喜び」が 71 名（55.0%），「喜んでもらえるのがうれしい」が 69 名（53.5%）であった（図 1）。

大学入学後のボランティア活動はしていない人が 131

表 1 大学入学前後のボランティア活動内容の比較（複数回答）

項目	入学前(n=129)	入学後(n=31)
障害者を対象とした活動	31(24.0%)	2(6.5%)
児童を対象とした活動	43(33.3%)	10(32.3%)
高齢者を対象とした活動	63(48.8%)	4(12.9%)
イベントに関係した活動	53(41.1%)	11(35.5%)
部活・サークルの行う活動	0(0.0)	4(12.9%)
その他	43(33.3%)	2(6.5%)

表 2 大学入学前後のボランティア年間活動日数の比較

活動日/年	入学前(n=129)	入学後(n=31)
1～10日	98(76.0%)	22(71.0%)
11～20日	10(7.8%)	3(9.7%)
21～30日	6(4.6%)	3(9.7%)
31日以上	15(11.6%)	3(9.7%)

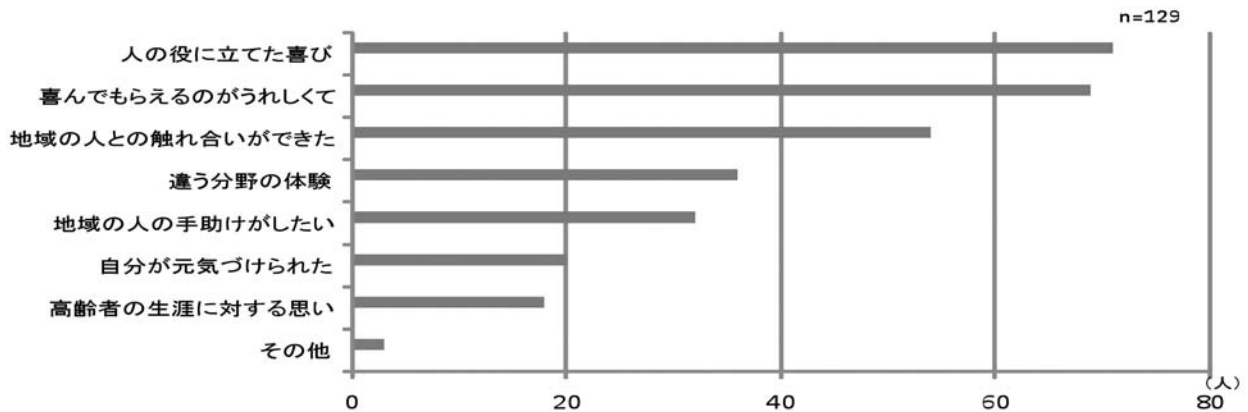


図1 ボランティア活動を継続する理由 (複数回答)

名 (80.9%) であり、理由として「機会がない」が60名 (45.8%), 「忙しくて時間がない」が57名 (43.5%), 「アルバイトしている」が51名 (38.9%), 「身体の不調・ゆとりがない」が10名 (7.6%) であった (複数回答)。大学入学前と入学後のボランティア活動内容と、ボランティア年間活動日数の比較は表1・表2の通りである。

3. ボランティア活動成果

ボランティア活動成果に対する回答の探索的因子分析に先立ち、まず17項目に対して項目分析を行った。具体的には、項目の識別性を通過率に着目して検討した。また項目の冗長性を Pearson 積率相関係数に基づく項目間の相関行列に着目して検討した。その結果通過率85%を超える識別性の低い項目も、相関係数0.80以上示す冗長性の高い項目は観察されなかった。その後ボランティア活動成果に関する項目17項目について最尤法による探索的因子分析を行った。結果、固有値・寄与率・解釈可能性に基づき、1因子から因子解を順次検討していった結果、2因子抽出できた (表3)。第1因子は、「やり甲斐が生まれた」「人に対する思いやる気持ちが意識づいた」「活動を通して自分自身が成長できた」など因子負荷が高い項目から「人生の意欲向上」と命名した。第2因子は「新しい出会いがあり人間関係が広がった」「仲の良い友達ができた」で構成され「人間関係の広がり」因子と命名した。因子間相関は $r=0.674$ であった。これらの因子の全項目の分散に対する説明率は61.7%であった。クロンバック α 信頼性係数は、第1因子は0.951、第2因子は0.870、全体で0.951であった。本研究では抽出された因子を構成する質問の回答得点の合計を、それ

ぞれ「人生の意欲向上」得点、「人間関係の広がり」得点とする。さらに、この合計を「ボランティア活動成果」得点と呼ぶ。

4. ボランティア継続動機

ボランティア継続動機に対する回答の探索的因子分析に先立ち、まず18項目に対して項目分析を行った。具体的には、項目の識別性を通過率に着目して検討した。また項目の冗長性を Pearson 積率相関係数に基づく項目間の相関行列に着目して検討した。その結果通過率85%を超える識別性の低い項目も、相関係数0.80以上示す冗長性の高い項目は観察されなかった。その後ボランティア活動成果尺度18項目について最尤法による探索的因子分析を行った。2因子にわたり0.3以上の高い負荷量を持つ項目を削除していった。結果、固有値・寄与率・解釈可能性に基づき、1因子から因子解を順次検討していった結果、3因子抽出できた (表4)。第1因子は、「人に喜んでもらえる」「人や社会に役立てる」「自己を再発見し成長させることができる」などから「他者志向型動機」因子と解釈できた。第2因子は「社会の一員として当然のことだ」「余暇が有効に使える」「毎日の生活に充実感が出る」から「自己志向型動機」と解釈できた。第3因子は「他のボランティアと楽しく活動できる」「友人を得ることができる」「自分の知識・経験・技術を生かすことができる」から「活動志向型動機」と解釈した。因子間相関は $r=0.565\sim 0.648$ であった。これらの因子の全項目の分散に対する説明率は57.6%であった。クロンバック α 信頼性係数は、第1因子は0.913、第2因子は0.710、第3因子は0.781、全体で0.921であった。本

表3 ボランティア活動成果に対する回答の探索的因子分析結果

項目	抽出された因子	
	人生の意欲向上	人間関係の広がり
X11 やり甲斐が生まれた	0.967	-0.228
X12 人に対する思いやりの気持ちが意識づいた	0.868	-0.060
X13 活動を通して自分自身が成長できた	0.858	-0.070
X10 気持ちの充実感が生まれた	0.812	-0.067
X14 活動を通して喜びや感動を経験した	0.802	0.065
X15 活動が生活の中で重要な部分となり自分のものになった	0.719	0.115
X1 人や地域に対して貢献しようとする気持ちが生じた	0.697	-0.150
X16 対象者や他のボランティアなど人と活動を共にする喜びを感じた	0.696	0.182
X3 自分にできることで社会と関わり人の役に立つことができた	0.667	0.012
X9 「もっと～したい」など自分自身を高める目標が生まれた	0.653	0.209
X17 必要とされていることが実感でき自信につながった	0.635	0.211
X4 対象者の幸福・安寧の為に新たな目標ができた	0.589	0.203
X8 対象者や他のボランティアから様々なことを教えられ勉強になっている	0.559	0.235
X2 日常生活の中で人との対応が好ましい方向に変わった	0.548	0.163
X7 新しい出会いがあり人間関係が広がった	-0.068	0.951
X6 仲の良い友達ができた	-0.084	0.898
固有値	9.94	1.21
累積寄与率(%)	56.1	61.7
因子相関行列		
人生の意欲向上	1	0.674
人間関係の広がり	0.674	1

因子抽出法：最尤法

プロマックス回転後の因子行列パターン

表4 ボランティア継続動機に対する回答の探索的因子分析結果

項目	抽出された因子		
	他者志向型動機	自己志向型動機	活動志向型動機
X6 人に喜んでもらえる	0.998	-0.236	-0.056
X12 人や社会に役立てる	0.817	0.232	-0.215
X14 対象者が喜びを感じることができる	0.811	-0.071	0.122
X7 自己を再発見し成長させることができる	0.729	-0.041	0.109
X13 自分の生活や将来にボランティア活動を通しての経験が生かせる	0.675	0.125	0.069
X18 活動を通じて積極的に社会参加できる	0.636	0.052	0.254
X1 喜んだり楽しんだりできる	0.587	-0.065	0.173
X10 社会の一員として当然のことだ	0.074	0.782	-0.134
X4 余暇が有効に使える	-0.083	0.491	0.244
X11 毎日の生活に充実感が出る	0.305	0.463	0.101
X17 他のボランティアと楽しく活動できる	0.265	-0.065	0.764
X15 友人を得ることができる	0.023	0.077	0.691
X16 自分の知識・経験・技術を生かすことができる	0.274	0.199	0.341
固有値	9.055	1.499	1.06
累積寄与率(%)	47.9	53.3	57.6
因子相関行列			
他者志向型動機	1		
自己志向型動機	0.648	1	
活動志向型動機	0.577	0.565	1

因子抽出法：最尤法

プロマックス回転後の因子行列パターン

研究では、抽出された因子を構成する質問の回答得点の合計をそれぞれ「他者志向型動機」得点、「自己志向型動機」得点、「活動志向型動機」得点とする。さらに、この合計を「ボランティア継続動機」得点と呼ぶ。

5. ボランティア活動の継続意志と活動成果得点・継続動機得点の比較

ボランティア活動を「継続したい」と回答した学生は126名(71.8%),「どちらともいえない」は18名(11.1%),「継続したくない」は18名(11.1%),であった。ただし、本質問には全員が回答しており、これまでボランティアをしたことが無い学生の場合は、今後始めたい、始めたくないという意味の回答も含まれている。本研究では便宜上この回答をボランティア活動の継続意志とする。ボランティア活動の継続意志と、活動成果得点を比較した(表5)。「継続したい」と答えた学生は「人生の意欲向上」得点43.7(SD6.0)で、「継続したくない」と回答した学生の得点36.1(SD7.5)と比べて有意差があった($p<0.05$)。また、「人間関係の広がり」得点においても「継続したい」学生は6.2(SD1.5),「継続したくない」学生は5.2(SD1.8)であり有意差が認められた($p<0.05$)。また、継続動機をみると、「継続したい」と回答した学生は、「他者志向型動機」得点、「自己志向型動機」得点、「ボランティア継続動機」得点が、「継続したくない」学生に比べて高く有意差が認められた($p<0.05$)。

6. ボランティア活動成果と継続動機との関連

ボランティア活動成果の2因子「人生の意欲向上」「人間関係の広がり」とボランティア継続動機の質問項目を因子分析した結果抽出された、3因子「他者志向型動機」「自己志向型動機」「活動志向型動機」の各得点をPearson積率相関係数に基づく項目間の相関行列を用いて分析した(表6)。ボランティア活動成果と継続動機との間に有意な相関がみられた($r=.808\sim.366$)。

考 察

1) ボランティア活動の実態

看護大学生の約8割が大学入学前にボランティア活動の経験があり、大学入学後ボランティア活動をしている学生は約2割であった。

木村ら⁷⁾は短大における調査で、入学前の学生の「ボランティア未経験者」は78.7%,短大入学後のボランティア経験者は35%と報告している。荒川ら⁸⁾は医療福祉系大学における調査でアンケート回答者の78%がボランティア活動を体験していることを報告し、現在ボランティア活動に参加している学生の62%は大学内のサークルで初めてボランティア活動を体験した学生であり、大学生のボランティアとサークルの関連を述べている。いずれも、本研究の入学後のボランティア経験者の2割に比べて多かった。荒川ら⁸⁾は「小・中・高等学校の授業の一環として」ボランティア活動を行った学生の95%は、

表5 ボランティア活動の継続意志とボランティア活動成果得点・継続動機得点の比較

ボランティア活動	n	ボランティア活動成果		ボランティア継続動機			
		人生の意欲向上	人間関係の広がり	他者志向型動機	自己志向型動機	活動志向型動機	ボランティア継続動機
継続したい(始めたいを含む)	126	43.7(6.0)	6.2(1.5)	23.9(3.2)	8.8(1.7)	9.1(1.9)	41.9(5.9)
どちらとも言えない	18	39.6(6.6)	6.2(1.5)	22.9(3.2)	8.4(2.3)	8.8(1.7)	40.1(6.6)
継続したくない(始めたくないを含む)	18	36.1(7.5)	5.2(1.8)	20.0(4.6)	7.5(2.1)	8.5(1.9)	35.7(8.0)

*: $p<0.05$ ()標準偏差
一元配置分散分析: 下位検定には Bonferroni を使用

表6 ボランティア活動成果とボランティア継続動機の変数間の相関関係

変数	活動成果1	活動成果2	継続動機1	継続動機2	継続動機3
1. 活動成果1 (人生の意欲向上)	1				
2. 活動成果2 (人間関係の広がり)	.612 **	1			
3. 継続動機1 (他者志向型動機)	.808 **	.512 **	1		
4. 継続動機2 (自己志向型動機)	.539 **	.366 **	.612 **	1	
5. 継続動機3 (活動志向型動機)	.512 **	.650 **	.698 **	.600 **	1

** : $p<0.01$

現在はボランティアに参加していなかったと述べ、「小・中・高等学校の授業の一環として」のボランティア活動体験は、大学入学後のボランティア活動と結びつかないと報告している。本調査でもボランティア活動をしてない学生の理由に、「忙しくて時間がない」があげられていた。看護大学生は資格取得を目指し過密な授業・演習・実習があるため、忙しさが増大しているのは否めない。しかし、入学後も2割の学生がボランティア活動をしており、ボランティア活動を継続したいと答えた学生が80%近くいることから、入学後ボランティア活動をしていない8割の学生の理由をもう少し丁寧に調査する必要があり今後の課題である。

2) ボランティア活動の継続意志と活動成果・継続動機の関連

本研究の調査ではボランティア活動を継続したいと答えた学生は126名(77.8%)であり、どちらとも言えない18名(11.1%)、継続したくない18名(11.1%)であった。看護を志す大学生のボランティア活動の継続意志とボランティア活動成果・継続動機についての関連を明らかにした研究は今までなく、今回、看護大学生でボランティア活動を継続したいと考えている学生の方が、ボランティア活動の成果として人生の意欲向上、人間関係の広がりを深く認識していることが分かった。また、継続動機についても、他者援助を通じて社会貢献を志した動機(他者志向型)、ボランティア活動を活用して自身の成長や充足を求めた動機(自己志向型)、総合点において継続したいと考えている学生の得点が高かった。しかし、継続意志があるにも関わらず、機会がない・忙しくて時間がない・アルバイトしていることを理由として大学入学後のボランティア活動をする人は減少し2割に満たないことが明らかになった。「機会がない」を理由にしている場合は機会があれば積極的に活動することにつながる事が考えられることから、ボランティアの情報提供などの取り組みが必要である。

3) ボランティア活動成果と継続動機との関連

ボランティア活動成果の2因子と、ボランティア継続動機の3因子の各得点をPearson積率相関係数に基づく項目間の相関行列を用いて分析した。活動成果と継続動機との間に有意な相関がみられた。このことは活動成果が強いことすなわち活動を通して新しい出会いがあり人間関係が広がり、援助を通して喜びや感動を経験し活

動が生活の中の重要な部分となり自分のものになったという実感が、「他者志向型」の活動を継続したいという意識につながることを示唆している。その活動が社会の一員として当然と思う気持ちが芽生え毎日の生活に充実感を覚えるといった「自己志向型」継続動機につながり、これからも自分の知識・経験・技術を生かすことができるといった「活動志向型」の継続動機となることが推察される。

活動成果を強く実感することがボランティア活動を継続する気持ちを生み出すことを現している。今後、ボランティア活動を実践する学生に活動成果を感じさせるような取り組みが必要である。

研究の限界と今後の課題

本研究は看護大学生のボランティアの実態とボランティア活動の継続意志・活動成果・継続動機について横断的に研究を実施したが、看護大学生の学年進行とともにボランティア活動の継続意志・活動成果・継続動機の推移に着目するには人数の関係で限界があった。今後の課題にしたい。

ボランティアできない理由には忙しくて時間がないがあげられているが、看護大学生は資格取得を目指し過密な授業・演習・実習があるため、忙しさが増大しているのは否めない。こうした状況にある学生に対し、地域貢献等ボランティア活動の推進を図るためには、ボランティア活動に対する強い動機づけが必要となろう。大学の地域貢献に参画するなどしてボランティア活動の成果を実感するように援助していく取り組みが必要である。このような介入による効果については、今後の研究課題である。

結 論

本研究は看護大学生を対象者にボランティア活動の実態を把握し、学生のボランティア活動の継続意志とボランティア活動成果・継続動機との関連を明らかにすることを目的に調査をした。その結果次のことがわかった。

1. 大学入学前、約8割の学生にボランティア経験があった。
2. 大学入学後、ボランティアをしている学生は約2割であった。ボランティアをしていない理由は、「機会がない(48.5%)」「忙しくて時間がない(43.5%)」

- 「アルバイトしている (38.9%)」などであった。
3. 大学入学後、ボランティアを継続したい (始めたいを含む) 学生は約 8 割であった。
 4. ボランティアを継続したい学生は、そうでない学生に比べて、有意に「人生の意欲向上」得点と「人間関係の広がり」得点が高かった。
 5. ボランティアを継続したい学生は、そうでない学生に比べて、有意に「他者志向型動機」得点、「自己志向型動機」得点、「ボランティア継続動機」得点が高かった。
 6. ボランティア活動成果と継続動機との間には有意な相関 ($r=.808\sim.366$) がみられた。
- 3) 妹尾香織, 高木修: 援助行動経験が援助者自身に与える効果: 地域で活動するボランティアに見られる援助成果, 社会心理学研究, 18(2), 106-118, 2003.
 - 4) 高木修, 妹尾香織: 現実場面における援助効果, 援助成果の検証, パソコン教室を事例としたフィールドワーク—関西大学社会学部紀要, 33, 59-86, 2001.
 - 5) 妹尾香織: 援助行動における援助者の心理的効果—研究の社会的背景と理論的枠組み—関西大学大学院人間科学, 55, 181-194, 2001.
 - 6) 山口智子, 高木修: ボランティア動機の構造について, 日本社会心理学第34回大会発表論文集, 224-225, 1993.
 - 7) 木村壽子, 川島美佐子: 本学における学生ボランティア支援の現状と課題, 足利短期大学研究紀要, 28(3), 9-15, 2008.
 - 8) 荒川裕美子, 吉田浩子, 保住芳美: 大学生の「ボランティア」に対する認識—医療福祉を学ぶ大学生を対象とした調査から—, 川崎医療福祉学会誌, 18(1), 203-211, 2008.

文 献

- 1) 中央教育審議会第 1 次答申「これからの学校は、〈生きる力〉を育成するという基本的な観点を重視した学校に変わっていく必要がある」(1997年)
- 2) 高木修: 援助行動の生起過程に関するモデルの提案, 関西大学社会学部紀要, 29, 1-21, 1997.

Nursing students' volunteer activities and motivating factors to continue them

Mutsuko Michihiro, Hiromi Kobayashi, Kazuko Wakai, Shizuyo Stou

Chie Saito, Miki Takeuchi, and Yuka Morisaki

Department of Nursing Faculty Health Science Hyogo University, Hyogo, Japan

Abstract This study aimed to examine the current status of volunteer activities implemented by nursing college students and the relationship between their intention to continue volunteer work and achievements/motivation. We conducted a questionnaire survey involving 230 first- to third-year nursing students of University B in Prefecture A. We collected 162 valid responses. Approximately 80% of the nursing students had experienced volunteering, while approximately 80% of the students had not participated in volunteer activities after entering the university, due to reasons such as being too busy and working part time. Volunteer activities produced positive results, such as a brightened life, shared joy, and improved enthusiasm for life, as well as a widened social circle, which motivated the students to continue their volunteer activities. Although most students had the intention of continuing their volunteer work, only approximately 20% were involved in such activities after entering the university. However, there were some students who cited “a lack of opportunities” as the reason. They are expected to become involved in volunteer work if they have a chance. It is important to provide students with sufficient information on volunteer work, and allow them to recognize the benefits of participating in such activities.

Key words : nursing students, volunteer activities, achievements from volunteer